

「ニヒリズム」という考え方の問題点

～問題は、存在の無根拠性ではなく“100か0思考”

2024年1月5日 宮国淳

<http://miya.aki.gs/mblog/>

本稿は、古東哲明著『ハイデガー＝存在神秘の哲学』（講談社現代新書、2002年）について分析した拙著、

ハイデガー理論における「概念の実体化の錯誤」

～古東哲明著『ハイデガー＝存在神秘の哲学』に関するいくつかのコメント、およびヒューム理論との比較

http://miya.aki.gs/miya/miya_report44.pdf

の続編である。上記レポートでは扱っていなかった第五章「惑星帝国の歩き方」（古東、193～272ページ）に対し、特にニヒリズムに関してコメントするものである。

結論から言えば、ニヒリズムそのものというより、ニヒリズムについて考える（おそらく一部の）哲学者たちの思考パターンの方がむしろ問題なのではないか。一部がだめなら全部だめ・・・と失敗や悪い事柄のみひたすら取り上げ全部を否定したり、絶対的な目的や指針、理念がないからといって目的、指針、理念に向かって行動することを否定したり空虚だと考えたりする、いわゆる“100か0思考”に陥ってはいないだろうか。

<目次> ()内はページ

1. 正しい事実認識に基づいているのか (2)
 2. “100か0思考”に陥ってしまっている (3)
 3. ニヒリズムは<存在問題>ではない (4)
 - 3.1. 「現前」していることは「存在」していることである
 - 3.2. 念々起滅・刹那生起＝“流れゆく瞬間”という一般的時間認識をエポケーできていない
考え方
 - 3.3. 存在は「隠蔽」などされていない
- <引用文献> (7)

1. 正しい事実認識に基づいているのか

一日は《今この時この場》。それだけが、リアルな時であり空間だったということである。一日はぶ厚く奥行をおびていたし、時々には生きている場所には、幾層にも重なり合った意味表情があふれていた。濃密なイマという瞬間と、無尽蔵なココという場所が、ゆったりおおきな振幅をえがいて、すっかり小宇宙をつくりあげていたように思う。
(古東、195 ページ)

・・・この説明に共感する人はどれくらいいるのだろうか？ 子どもの頃に“幾層にも重なり合った意味表情”など読み取っていただけだろうか？ むしろ年を重ね様々な経験を経てきた人だからこそそういうものが感じ取れるようになると思うのだが。

子どもの頃は集中力が続かない。時間を忘れ物事に打ち込めるようになるのもむしろ大人になってからだと思う。子どもの頃は知識もないから遠い未来について明確に想像はできないが、明日のことやら今日の晩御飯のことなどは想像できる。夏休みに何をして遊ぼうとか、クリスマスプレゼントは何が欲しいとか、お年玉で何を買おうとかか考えたりもする。瞬間瞬間に生きていたという実感は少なくとも私にはない（むしろ大人になってからの方がそういう場面が多い気がする）。目標を持つからこそ瞬間瞬間が大事に思えたりもするのではないだろうか。

こういう”昔はよかった”、”子どもの頃はよかった”という回顧は時折見かけるのであるが、よくよく振り返ってみれば、本当にそうなのか疑わしいものである。もちろん子どもの頃の方が実際に良かったという人がいることも否定はしないのだが。しかしそういう場合も子どもの頃は気楽で良かったとか、責任がなくて楽だったとか、現在のつらさと比較したものなのだろうと思う（ほかにも人によっていろいろ事情はあるだろう）。古東氏の説明は、過去を美化しすぎているように思えるのだ。

周囲にいる人々の気持ちを推測したり、その人たちの人生について思いを馳せたり、まったく知らない人に関する本を読んで、その人の人生をささやかながらかみしめ味わうなんてことは、子どもにはできないことである。

様々な失敗をしてきたからこそ、他人の失敗に対し寛容になれたり心配りが出来たりする。打ち込めることが見つからなかったり、満足できる仕事が見つからなかった時期があったからこそ、あることに打ち込めたり一生懸命仕事をできることに有難みを感じたりもできる（ブラック企業は論外であるが）。

2.” 100 か 0 思考” に陥ってしまっている

自力改革的発想 (人為主義) 自体が、おおきな過誤を犯す危険があること。(古東、200 ページ)

・・・「この世を動かす、根本の動性や構造があること。それは、ぼくたち人間の意志や願望といったヒューマンな要因を、はるかに超えてはたらいっていること」(古東、199～200 ページ) が否定できないとしても、誰かが何かをしようと始めなければ結局何も始まらない。

もちろん失敗することもある。しかし成功することもある。失敗だけなら人類は今頃滅びているだろう。古東氏は失敗例だけことさらに取り上げ、一部の失敗ですべてダメだという思考に陥ってはいないだろうか？

失敗したら、その経験をもとにもっと良い方法を模索するしかない。ただそれだけだ。

十九世紀末以来、いろんなものが失われていった。なかでも、二つの《神》の死は、決定的だった。《神》とはこのばあい、人格神のみを意味しない。むしろひろく、(1) 生や世界の究極根拠 (目標・価値・規範・理由) と、(2) 客観的真理 (確実な知) を意味する。

前者の死からは生存のニヒリズムが、後者の死からは知のニヒリズム (近代科学の危機) がうまれた。(古東、217～218 ページ)

・・・(1) については古東氏も述べられているように、もともとそんなものなどない、という結論で問題ない。しかし(2) については明らかな事実誤認である。

様々な人たちの間で見解の対立があったとしても、対立している私と彼・彼女との存在は確実に認められている。そして皆が地球上に住んでいることも疑わないであろう。誰かが「そんなこと嘘だ！」と叫んだところで私たちの知識に対する信頼は揺るぎはしない。

存在は隠されたりはしない。自宅でハイデガーの本を読んでいるとき、トイレに行きたくなればそこに行けば必ずトイレはある。それを疑うこともない。

科学理論においてまだ確実でない部分があったとしても、科学理論全体を否定するものではない。古東氏は(後でも述べるが) ”100 か 0 思考” に陥ってしまっているのだ。一部不確実な部分があれば全体が空虚ということになってしまっている。

人と人とが対立し合意に至れないこともある。だからと言って人と人とは絶対に分かり合えないのだと結論づけられはしない。

3. ニヒリズムは<存在問題>ではない

3.1. 「現前」していることは「存在」していることである

現象ニヒリズムが可能になってくるのは、そもそも「存在それ自体が無と化し、まるで無いも同然となっていること」による、というのである。よく知られた「存在忘却（存在棄却）」のことだ。だがそれは、忘却する人間側の怠慢ということではない。すでに第四章でのべたように、存在自体が三つの意味で無にほかならないことに、起因する。

（古東、226 ページ）

・・・とし、次のように説明している。

（1）まず存在は、モノではない。だから、モノのように現前しない。現前しないから、ぼくたちのまなざしからいやでも逃される。そのため自然と、空虚なことになってしまう。（古東、226 ページ）

・・・これも詭弁である（上記拙著参照）。そこに見えているということが、存在することなのである。上記の言葉で言えば「現前」しているということが「存在」することなのである。知覚経験として現れるということが存在することなのである。

それは視覚だけではない。聴覚、触覚、あるいは機器を用いた間接的観測も含まれる。そして現前していない場合においても、何らかの方法で観測しうる可能性がある場合、やはり存在すると考えられるのである。

具体的経験として“空虚”であるならば、それは「存在していない」ということと同義である。

3.2. 念々起滅・刹那生起＝”流れゆく瞬間”という一般的時間認識をエポケーできていない考え方

次に「存在自体が三つの意味で無にほかならないこと」の二番目についてである。

（2）そもそも、念々起滅が存在。存在は刻一刻、無と化すという仕方しか<現れ>ない刹那生起。だから、存在<について>ことさら認識しようと身構えても、原理的に認知不可能。亡失され無視されても、むしろ当然である。（古東、226 ページ）

・・・こういった考え方は、過去→現在→未来、そして”瞬間”としての現在、一瞬に流れ去る現在という一般的・客観的時間認識、”流れる時間”という一般的時間認識をエポケーできていないことから生じるものである。「万物は流転する」という考え方も同様である。

こういった時間認識をいったんエポケーするとはどういうことなのか・・・要するに私たちの具体的経験そのものを振り返れば良いだけである。そこに何か見える。じっとしていればそのままである。白い壁を見ている。じっと見ていればそのままである。変化などしていない。そこには「瞬間」も「刹那生起」もない。

しかしそこでふと別の方向を向いて部屋の外の風景を見れば、知覚経験は確かに変化している。知覚経験だけではない。ぼーっとしているとき、ふと牛丼を思い浮かべたり「牛丼が食べたい」と言語化したり、そういった様々な具体的経験の変化、それが時間の流れなのである。

先の拙著でも紹介しているが、時間についてはヒュームが究極的な答えを出している。再度ここに掲載する。

時間の観念は、印象だけでなく観念も含めて、また感覚の印象だけでなく反省の印象も含めて、あらゆる種類の知覚の継起に起因するのである(ヒューム、34～35 ページ)

われわれが時間の観念を形作るのも観念や印象の継起によるのであって、時間がそれだけで現れたり、心に気づかれたりするのとは不可能である。われわれが継起する知覚を持たないときにはどんな場合でも、たとえ対象に実際には継起があったところで、われわれは時間についてなにも知ることはできないのである。時間は、それだけで心に現れたり、動かず変化しない対象に伴って心に現れたりはず、つねに、ある変化する対象の知覚しうる継起によって見出される、と結論してもよからう。(ヒューム、35 ページ)

さらに古東氏は、次のように続けるが・・・

こうした存在自体の原理的な隠蔽性(隠れることを好む性格)ゆえ、存在など最初から失念する思想の立場が形成されもする西洋の伝統的志向方式(ハイデガーは「存在神論」となづけ徹底的に批判する)、つまり形而上学がそれである。形而上学は次の二つを柱にする。

①感性的で、はかない地上世界を超えた、超感性的(形而上学的=背後世界的)根拠の想定。

②その超感性的根拠を、地上的な存在者全体に一つの方向や秩序をあたえる、理想とか規範とか目標とか価値とか法則とか起源とみなす思考スタイル、

この二つの柱によって、この世の<存在>が最初からすべて、その超感性的原理(ト

ップモデルが人格神)の方から見られ、位置づけされ、意味づけされる。(古東、226～227 ページ)

・・・そもそも存在に”隠蔽性”などどこにもないのは明らかである。そもそもこれらは「存在」に関する問題ではない。私たちが生きる際の方針の問題、存在の隠蔽性（実際にそんなものはないのだが）と全く関連のない問題である。

そして「超感性的（形而上学的＝背後世界的）根拠」や「理想とか規範とか目標とか価値とか法則とか起源」、そういうものを想像したり考えたりすることは自由である。上記①と②の問題はむしろ以下の二点であるといえよう。

- ・ 事実として正しいのか
- ・ 賛同しない人たちにそれらの考えを強制してはいないか

3.3. 存在は「隠蔽」などされていない

最後、「存在自体が三つの意味で無にはかならないこと」の三番目について・・・

(3) だが、その自明性をやぶる出来事がおきる。現象ニヒリズム（超感性的原理の死）のときである。そのとき、生きて在ること自体が、もはやどうしてもよいもの(nichts)でなくなる。

だが、存在はその場合、まずは不気味な底なしに虚無のすがたで<現れる>。そのため存在は、まさに否定的で、虚無的で、吐き気をもよおす禍悪なことと、想われてしまう。

その醜悪な表づらに圧倒されて、その結果、存在の素顔（存在の真理）におよばず、存在は存在それ自体としては、否認されつつける。存在の素顔（存在神秘）に気づかないそのことが、「歴史的な根なし草の状況」（65-116）をうみだす。世界や人生や思考の全体がすべて、確固たるベース（根拠・規範・理由・目標）を欠落させたまま営まれているという、すっかりぼくたちになじみの現代生活の風景が、こうして発病する。(古東、227 ページ)

・・・どのあたりが”病”なのか不思議で仕方がないのだが。要するに”何も決まっていない”ということである。私たちが生まれる前提として規範などがあらかじめ定められているわけではない、という当然の”事実”である。

だったら、私たち一人ひとりが思うように指針やら方針を決めたって良いし、他の誰かが考えた方針や理念を追いかけていくことも勝手である。(とくに個人的には) 長期的指針を

定めてもよいし定めなくてもよい。そんなものどちらでも良いのだ。ただ方針・指針が対立するような場合、衝突は避けられないが。

そしてそれらの方針やら理念は決して”虚無”ではない。

むしろハイデガーのように、「存在」というものを具体的知覚経験、具体的存在物から遊離させた”概念”として、別の何かとして扱い、事実とは異なる屁理屈をいじくりまわす哲学的営み自体が”病”なのではなかろうか。

ハイデガーも古東氏も”100 か 0 思考”という一種の”病”に陥っているのではなかろうか。絶対的な価値がないことを「歴史的な根なし草の状況」と考えてしまうこと自体が一種の”病”と言えなくもないのである。

絶対的な理念がない＝無根拠ではない。絶対的な理念がなければ虚無なわけでもない。その時その時の目標に向かって進むことは虚無でもないし、否定されることでもない。私たちは実際に存在し、様々なことを実行し経験し、様々な感じとっている。「私は何を目的に生きているのだろう」と迷う時でさえ私は実際に存在している。存在はまったく隠蔽などされていらない。ハイデガーなんか私たちに私たちの生き方をどうこう言われる筋合いなどない。まったくもって余計なお世話である。

おそらくであるが「否定的で、虚無的で、吐き気をもよおす禍悪なこと」と思ってしまうのは、(依存できる)絶対的な理念・絶対的な「生きる意味」が既に準備されているという期待というものが前提となっているのかもしれない。そういうものを信じていた人が、それが実際には絶対的なものではなかったと知る、そういうシチュエーションを想定しているのかもしれない(「神の死」：古東、201 ページ)。宗教的バックグラウンドの違いによって感じ方は様々なのだろう。

いずれにせよニヒリズムというのは絶対的なものがなければ虚無だと考えてしまう”100 か 0 思考”という“病”の別名なのだと言えよう。＜存在問題＞(237 ページ)というものは全く関連のない話なのである。

<引用文献>

古東哲明著『ハイデガー＝存在神秘の哲学』講談社現代新書、2002 年
ヒューム著『人性論』土岐邦夫・小西嘉四郎訳、中央公論社、2010 年

※ 時間論に関しては以下の拙著を参考にいただければと思います。

ヒューム『人性論』分析：「関係」について

http://miya.aki.gs/miya/miya_report21.pdf

哲学的時間論における二つの誤謬、および「自己出産モデル」の意義

http://miya.aki.gs/miya/miya_report17.pdf